



きたもと てつゆき
北本 哲之 教授

～ 病態神経学分野 ～

講義題目

つれづれ 188

略歴

1981年3月 和歌山県立医科大学医学部卒業	1995年4月 東北大学医学部教授
1981年6月 九州大学医学部附属病院	1999年4月 東北大学大学院医学系研究科教授
1986年9月 九州大学大学院医学研究科博士課程修了	2006年1月 東北大学大学院医学系研究科附属創生応用 医学研究センター長（併任～2009年12月）
1986年10月 九州大学医学部附属病院医員	2016年4月 東北大学附属図書館医学分館長 （併任～2020年3月）
1987年10月 九州大学医学部附属脳神経病研究施設助手	2022年3月 退職
1988年4月 九州大学医学部附属脳神経病研究施設講師	
1994年8月 九州大学医学部附属脳神経病研究施設助教授	

北本哲之教授は、1981年に和歌山県立医科大学医学部を卒業され、1986年に九州大学大学院にて医学博士を取得後、1987年から九州大学医学部助手、1988年から医学部講師に1989年からは文部省在外研究員として西ドイツ・ハイデルベルグ大学分子生物学センターに出張され(Konrad Beureuther 博士)、1994年に九州大学医学部助教授、そして1995年に東北大学医学部教授になりました。

北本教授が、東北大学に赴任して2年目の1996年に英国の牛のプリオン病である狂牛病(BSE)がヒトに感染したという報告がなされ、その4月にはWHOで専門家会議が招集され日本代表として参加し、1996年中に東北大学の病態神経学分野がWHOのCollaboration Centerとして世界の7拠点の1つに認定されことになりました。また、国内的には厚生労働省のプリオン病研究班の班長となり、国内のプリオン病の調査・研究を任されることとなりました。

北本教授は、プリオン病研究において重要な学術上背景となる本邦のCJDサーベイランス委員会を立ち上げ、このサーベイランス委員会は現在まで20年以上継続しております。この委員会の調査によって、東北大学で見出したプリオン病の発病予防因子が、オッズ比27以上の予防効果をもつことが明らかとなり、またわが国で大問題である硬膜移植後のCJDの30%の症例についても、従来には本邦で存在しないプリオン病であることを明らかとしました。

そして、東北大学で樹立したヒト型ノックインマウスを用いて、新しいプリオン病はV2プリオンがcodon129Met/Metのヒトに感染した結果生じたものであることを証明しました。また、同じ家族性プリオン病の変異で、明らかに異なるプリオンが生じることも、ヒト型マウスを用いた業績です。

北本教授は、国際共同研究も積極的に行ってきました。東北大学が世界で初めて作成に成功したタイプ2の異常型プリオン蛋白に対する抗体は、世界中の研究者から望まれ、米国・カナダ・英国・イタリアに供給しています。特に、数多くの共著論文を公表している研究先者として、アメリカではCase Western

Reserve 大学の Gambetti 教授、イギリスでは Edingburgh 大学の Ironside 教授、イタリアでは Bologna 大学の Parchi 教授などがおり、それ以外でも WHO 経由で多くの研究者との交流・共同研究を行い、プリオン病の病態解明に貢献されました。